

自作文の書き写しによる文章作成能力向上効果の検討

Whether transcribing one's own writing is effective in improving writing skill

阿部詩織[†], 高宗 楓[†], 西本一志[†]
Shiori Abe, Kaede Takamune, Kazushi Nishimoto

[†]北陸先端科学技術大学院大学
Japan Advanced Institute of Science and Technology
s2210005@jaist.ac.jp

概要

現在、様々な場で文章を作成する機会が多く存在する。本研究ではその際に起こる「何を書いたら良いかわからなくなってきた」といった現象の解決に自作文の書き写しが有効であると示すことを目的とした。そこで、文章作成が不得意または得意である大学院生を対象に実験を行った。その結果、文章作成が苦手な方には書き写しの有効性がみられたが、執筆が得意な方には効果がみられなかった。これの結果は執筆能力とタイピング能力が関係すると考えられる。

キーワード：創造支援

1. はじめに

現在、様々な場で文章を作成する機会が多く存在する。例えば、大学の講義後のレポートや入試の小論文、就職活動のエントリーシートなどである。我々は、これらを執筆する際に起こる「何を書いたら良いかわからなくなってきた」といった現象を解決したいと考えた。この現象は執筆者の思考が混乱することによって引き起こされていると仮定し、この場合の文章執筆中断を解決する方法を検討した結果、文章の書き写しが効果的ではないかと考えた。

書き写しの効果については様々な研究で検証されており、文章作成支援においても検討されている。福本らは文章表現能力向上を目的に手本となる文章の書き写しを提案している[1]。この研究では手本の文章となる新聞のコラムを書き写し、その後要約文の作成を行う事で文章表現能力の向上を図った。しかし、要約文が手本の内容をほぼそのまま書き写したものになっているケースが多く、個別でその人なりの文章の書き方を指導しなければならなくなってしまう。この研究から、他者が執筆した手本を書き写すという行為は、自分にない文章特性を得てしまうことにより文章の書きづらさを促進してしまう危険性があるので、他者の文章を用いることがない方法を検討すべきだと考えた。

本研究では、文章を書く際に執筆者自身が途中で執筆した文章を書き写す手段を提案する。これにより、

自身の書いた内容の理解を深め、文章を書き進める際の足がかり効果をもたらすのではないかと考えた。そこで本論文では、文章執筆時に「何を書いたら良いかわからなくなってきた」となった際に自作文を書き写すことで得られる効果について検討を行う。

2. 実験 1

実験 1 では、文章執筆が苦手な人を対象とした提案手法の効果について検討する。本実験はオンライン形式で行えるように、PC 上で文字をキーボード入力して文章を作成する方法で行った。執筆の中断を起りやすくするため、事前アンケートにより選出した文章能力に不安がある大学院生 1 名を実験協力者とした。執筆の中断を誘発するためには、書きにくいテーマが必要である。そこで賛否が分かれ、かつ知識が無くても書くことが出来るような2択の問題を用いることとした。具体的には事前に「給料は安いけど楽しい仕事、給料は高いけどつまらない仕事、どちらの職場で働く？」と「一生禁止されるなら肉、お酒、どちらが良い？」といった2択の問題を提示し、実験協力者に回答をもらった。その後、実験協力者による回答とは逆の選択をするように他者を説得する内容のレポートを実験協力者に執筆してもらった。文字数は大学入試の小論文問題で最も用いられる 800 文字程度とした。

実験時間は執筆者の文章能力に依存するため、全体で最長 3 時間として、2 回行った。1 回目の実験では、執筆中に「行き詰まった」と感じた際に声をかけてもらい、執筆済みの文章を読み返す時間を 15 分間とった。その後執筆を再開してもらい、800 文字まで執筆してもらった。1 回目の終了後、疲労を鑑みて時間を空けてから 2 回目の実験を行った。1 回目と同様に、執筆開始後「行き詰まった」と感じた際に声をかけてもらい、それまでに執筆した文章の書き写しを 15 分間で行ってもらった。その後文章の続きを完成するまで書いてもらった。1 回目の実験と 2 回目の実験のそれぞれで執筆さ

「給料は安いけど楽しい仕事のほうが良い」を選んだ理由は、3つある。1つ目は、楽しくない仕事を続けるモチベーションを保てないことである。つまらない続けにくく、やめてしまう可能性が高い。その場合、より長く続けられた楽しい仕事の方が、全体的に得た収入が高くなる可能性が大きい。また、実験として、つまらない仕事は職場の人と関わろうと思えなかったが、楽しい仕事では人とコミュニケーションによって仕事をより楽しく取り組もうと、さらにモチベーションを高めようと自ら動けたことがある。職場の人とつながりができ、プライベートでも交流して多くの人脈を得られた。2つ目は、楽しい仕事の方がやりがいを感じられることである。実験として、つまらない仕事より楽しい仕事の方が、より長く続けられ、収入や自身で得た技術、やりがいなどの全体の満足度が高かったことがあげられる。前向きに楽しく業務に取り組んでいるため、仕事の技術などを自身のものにしていくと感じられる。逆に、つまらない仕事の場合は、「やらなきゃ」「終わらせなきゃ」といったマイナスな思考で業務を行ってしまい身にならない可能性が高い。また、やりがいの感じる楽しい仕事の方が、給料をもらったときに自身は働いて稼いだという実感が強く感じられると考える。3つ目は、憂鬱感がなく、ポジティブに働けることである。楽しい仕事の場合、その日の業務内容や職場の人のことを考えて仕事に向かい、業務中も次の作業をどうこなすかなど職場の人と話しながらポジティブに働いている実験がある。また、つまらない仕事の場合、朝起きたときからその日に仕事がある憂鬱な気持ちで1日過ごしていた実験がある。このことから、つまらない仕事の場合、仕事に向かう前から「仕事に行かなきゃ……」と憂鬱な気持ちになるが、楽しい仕事の場合、ワクワクし前向きな気持ちで仕事に向かえると考える。よって、「給料は安いけど楽しい仕事、給料は高いけどつまらない仕事、どっちの職場で働く？」という問いに対して「給料は安いけど楽しい仕事のほうが良い」を選んだ。

図1 実験1の2回目で執筆された文章

れた文章を比較し、さらに全実験終了後に行ったヒアリングにより、自作の文章を単に読み返した場合と書き写した場合とで、「行き詰まった」後の思考の違いを検討した。

ヒアリングの結果、「1回目より2回目の方が自分の文章の振り返りを行っていた」という意見が得られた。さらに、1回目では中断し、15分の読み返しをした後に文章の続きを考えていたことに対し、2回目では15分の書き写しを行っている最中に追加内容を思いついていた。この結果から、書き写しには文章内容を充実させ、執筆内容を考えるきっかけとなる効果がある可能性が得られた。

中断後の執筆文章にも違いが見られた。1回目の実験では中断前に執筆した文章自体には変更を加えることは無く、その文章の後に新規な文章を書き加えることで文章を完成させていた。一方2回目では、中断前に執筆した文章の中身を加筆修正することで完成させていた。図1に2回目の実験で執筆された文章を示す。図1の赤字部分が書き写し後に加筆された文章である。この結果から、書き写し行為にはそれまでの文章を内省し、その文章内容をより豊かにするような追加要素を導き出す効果がある可能性が得られた。

3. 実験2

実験2では、文章執筆が得意な人を対象とした提案手法の効果について検討する。実験2も、オンライン形式で行えるように、PC上で文字をキーボード入力して文章を作成する方法で行った。執筆テーマや文字数

お酒と肉のどちらかを禁止するとして、肉を一生禁止して酒を禁止しない方が良い方が多い理由は3つある。一つは、肉の食べ過ぎは健康に悪いという理由だ。もう一つは、肉を食べることは残酷だからという理由だ。三つ目は、酒という文化は大切にしなければいけないという理由だ。

一つ目の肉を食べすぎると健康に悪いのは、一般によく言われることだと思う。焼肉、ステーキ、ハンバーガーと聞いて健康的なイメージはないだろう。どれも脂質が過剰にもかかわらず食べ過ぎてしまう魔力がある。

二つ目に肉を食べることは残酷だからという理由について、肉を食べるということは動物を殺して食べているということを認識しておかなければならない。酒はコメなどから作られるが、肉は意思を持った命を絶って食卓に届けられる。肉を食べるのをやめれば、犠牲になる命も減る。

三つめの酒という文化を大切にしなければいけないという点に関して、酒を飲みかかず文化は世界中にある。友人と職場の仲間と、家族と酒をたしなむことは、非常によいコミュニケーションであり、なくすことは生活に影響がでるだろう。また、酒造という文化も大切にしなければならない。日本では47都道府県のそれぞれで地域の日本酒がある。日本の主食である米文化の一つとして、米から作られる酒も大切にしなければならない。

酒は文化として代わりになるものがない。対して肉は、日本で食べ始めたのは欧米の影響であり、そんなに歴史が深くない。肉を食べるのをやめても魚や豆腐など、たんぱく質源に困ることはない。むしろ肉よりもヘルシーなたんぱく質源であふれている。

以上の理由から肉とお酒どちらかを一生禁止するとき、肉を禁止することを選んだ方がよい。肉は脂質が多すぎて健康的ではないたんぱく質以上に、家畜を殺して食べなければいけなくて家畜の犠牲がある。また、肉の文化は酒の文化よりも浅く変えがきくため、禁止しても困らない。酒は、いろいろな人とのコミュニケーションに大切なものであり、酒を造って飲むという文化は歴史があり、大切にしていかなければならない。よって酒は禁止してはいけない代物である。

図2 実験2の2回目で執筆された文章

についても実験1と同様である。実験協力者は、文章執筆が得意な大学院生1名である。

実験時間や形式は実験1を踏まえ、若干の変更を加えた。1回目の実験では、実験開始20分後に声をかけ、15分間執筆済みの文章を読み返す時間とってから津続きの執筆を再開してもらい、最終的に800文字まで執筆してもらった。2回目の実験は、疲労を鑑み翌日に行った。1回目と同様、執筆開始20分後に声をかけ、執筆済み文章の書き写しを15分間行ってもらい、その後続きを書いてもらった。1回目の実験と2回目の実験のそれぞれで執筆された文章を比較し、さらに全実験終了後に行ったヒアリングにより、自作の文章を単に読み返した場合と書き写した場合とで、「行き詰まった」後の思考の違いを検討した。

図2に、2回目の実験で執筆された文章を示す。今回の実験協力者は、いずれの実験でも実験開始後20分で800字に達して一通り文章作成を完成していた。またいずれの実験でも執筆済み部分に対する大きな加筆修正は無く、内容に直接関係がない多少の修正のみであった。ヒアリングでは「書き写しは文章の見直しよりもタイピング練習の気分になっていた」という意見が得られた。また、書き始める前に筋道をたて執筆内容を考えた後に書き始めており、執筆中に内容を考え直すことは無かったと述べていた。このことから、文章執筆が得意な人にとっては、800字程度の短い文章の執筆では途中で考えを整理する必要が無く、書き写しが有効に作用すると仮定している思考の混乱がそもそも生じていなかった可能性が考えられる。

4. おわりに

本研究では文章執筆において自分が書いた文章を書き写しすることで自身の書いた内容の理解を深め、文章を書き進める際の足がかり効果をもたらすことができると考え、その効果を検証するための初期的な実験を行った。結果から、書き写しは文章執筆が苦手な人に対しては有効に働くが、文章執筆が得意な人に対してはあまり効果がみられない可能性が示唆された。ただし今回の実験では、文章執筆が得意な人について「これ以上書くことがなくなった」という状況を作りだせなかったことが問題だと考えられる。文章執筆が得意な人を対象として、より長く複雑な内容の文章執筆を求めることによって「これ以上書くことがなくなった」という場面を作り出す実験を行う必要がある。

今後は、さらに実験協力者を増やし実験を行う。書き写し効果が実証された際には、人からの指示でなく書き写しに導いてくれるシステムや、さらに効果的に文章内容の再考を促すシステムの開発を予定している。たとえば、手が止まるまでに書いていた文章の単語を変化させ、違和感を生じさせることでより文章理解を促すシステムなどを検討している。

参考文献

- [1] 福本久人,田端吉彦,岡本 美幸,筑 重和,(2012)“文章読解能力および文章表現能力の向上の試み”,第 28 回東海北陸理学療法学会大会